『クランフォード』における服装描写の意味について

能　澤　慧　子

ギャスケル夫人の著作『クランフォード』には、人々の日常生活の描写が豊かに見られ、中でもその服装に関する描写は、西洋の服装史研究を専門とするものの興味を惹くところである。そこからはまず第一に、19世紀の流行史研究の資料の中心とされているファッション・ブック、肖像画、タブロー画、カリカチュア、新聞、雑誌などの挿絵などからだけでは捉え難い、地方都市に住む中年や老境にさしかかった、そして地味で質素な人々の衣生活を拾うことができる。そして第二番目に、物語の語り手や登場人物の口を借りて述べられる服装の描写とコメントからは、服装に関する彼女等の感情や価値観などの、内面を汲み取ることができる。それらはとりもなおさず、作者自身の声であり、思想の表現であることは言うまでもないが、またこの作品の主題を支える、欠くべからざる細部とも言えよう。

19世紀半ばといえば、18世紀までの身分による服装の差異が薄れる一方で、服装を含めた生活の様式が人物の階級を定め、その人間としての価値まで左右しかねないほどの意味をもっていた時代であり、こうした状況が、流行の変化と華美を促進させ、だれもが異常なまでの情熱を傾けた時代であった。ことに19世紀に入ってからの女性の服装の華やかさは、男性のそれを完全に凌駕しており、女性にとってそれはまさに最大の関心事であったといえよう。

こうして見ると、作品の中で語られたクランフォードの住人の服装に対して、私は服装の歴史研究の立場からの興味を禁じ得ない。それらは、実際には存在しなかった単なるユートピア的理念に過ぎないかもしれないものの、彼女等の、しばしば揺らぎかける古ぼけた信念への皮肉とユーモアのかげに隠された、時代の風潮への作者の痛烈な批判とも受け取れるからである。それはまた山脇百合子先生の述べられるように、「作品『メアリー・バートン』のかかげた大きな社会問題と同じ位、それよりもっと大きな『人間の生き方』

という根本問題」[1]の提示であるとも言えよう。

私は作品の中の具体的服装及びそれらに対する彼女らの態度に関する描写の中の、およそ三つの特徴的内容に特に興味を覚えた。その一つはそれらの殆どがひどく古ぼけて、流行遅れであること、二つ目は彼女らの帽子に対する独特の態度、そして三つ目は彼女らの服装が貧しいながら、クランフォード特有の決まりにのっとっていることについてである。

＊　古びた貧しい服装

まず、一番目の、彼女らの身なりの貧しさについては、物語の冒頭から語られている。

…着るものは流行にまるでおかまいなし。

「お互いに誰もかれも知りあっているこのクランフォードで、どんな着物を着ようとそれがどうだというのです？」

というわけだからです。では、他所へ出かければどうかというと、やはり同じことなのです。

「誰も知らないところで、どんな着物を着ようと、それがどうだというのです？」

着物は概して、良質の地味な生地、大多数の人は清潔では定評のあるミス・タイラー同様に、ひどく身じまいにやかましい。イギリスじゅうで、時代遅れのジゴ袖とかタイトのきゅうくつなペチコートなどが最後まで見られた…しかも誰も笑ったりしなかった…のはクランフォードだと、これは私がうけあってもよいくらいです。[2]

クランフォードきってのお洒落な女性といえども、決して最新流行というわけには行かない。

彼女はクランフォードのどのご婦人よりもいい身なりをしていましたが、それもあたりまえのことです。かって店の売物だった帽子やらけばけばしい派手なリボンやら、全部出してきて身につけているんだそうですから。彼女が店をたたんでから５、６年になりますので、クランフォード以外の場所でしたら、彼女の衣裳は流行遅れと思われたことでしょう。[3]

この“お洒落”な女性がパーティに招いた若い女性、メアリー・スミスに退屈しないようにと、親切にも勧めたのは、「しゃれた装丁の十年かそこら前

のファッションの本」であった。

しかし、クランフォードの女性達にとって、十年前の流行は古い部類には入らない。彼女らが頑として守っているスタイルの中には、数十年も昔に流行したものもある位なのだから。

さて、3、4人の淑女たちがカラシュをかぶって、ミス・バーカーの家の玄関に集まってきたのは、日も長く、うららかになった春の宵のことでした。「カラシュ」って何だか御存じですか？（中略）このかぶりものは、いつでもクランフォードの子供たちに異様な印象を与えるので、今日も2、3人の子供が静かな通りで遊んでいるのをやめて、無言のまま不思議そうな顔でミス・ポールとミス・マティーと私のまわりに集まってきました。[4)]

カラシュは18世紀末に流行した戸外用の被り物で、その名の通り馬車の幌の形をしている。そして1851、2年頃には、作者が同時代人である読者に、「カラシュって何だか御存じですか？」と問いかけていることからも、また作中で子供達を驚かしていることからも、流行からすでに久しくなっていたものであることは、明らかである。

こんな風にドランブルという、マンチェスターをモデルにした大都会からやってきた語り手「私」、つまりメアリー・スミスの目には明らかに流行遅れととれる服装のスタイルを、クランフォードの住人達は、決して互いに笑うことなく、毅然として守り続けているのである。

＊　帽子のお洒落

次に帽子についての記述を紹介しよう。クランフォードのレディ達が衣類の中で最も頻繁に購入するのはこの帽子である。平凡で単調な日々を活気づける様々な些細な出来事….町を訪れた奇術師の公演見物、名門貴婦人の来訪を歓迎するパーティー、3、40年振りの恋人の訪問、株主総会への出席….こうした折りに彼女等が何はさておき新調するのは帽子であり、また帽子のみでもある。19世紀までの女性の服装においては、たしかに帽子は常に重要な位置をしめており、女性がお洒落をする場合には必ず気を配ったところであった。けれどもクランフォードの女性達の場合には、しばしばこの帽子一点にお洒落が集約され、この新調の帽子に、それとは対照的な古めかしいドレスや装身具を組み合わせるのが特徴である。帽子に関するメアリー・スミスの表現を拾ってみよう。

古い上衣に、年を経た白いカラー、(中略) 古いブローチをいつも変わらず装飾につけ、それに時の流行にあった新しい帽子をかぶる――これでクランフォードのご婦人は、(中略) いつもつつしみ深くきちんとした上品な身なり (chaste elegance and propriety)をととのえられたわけです。[5)]

クランフォードでは衣装にお金をかけるというのは、おもに上に述べた一つの装身具だけを意味していたのです。頭さえしゃれた新しい帽子に隠れていれば、身体の他の部分はどうなっていようとかまわないというので、まるで頭隠して尻かくさずの鴕鳥みたいでした。[6)]

彼女等にとって、帽子はただの帽子であるだけでは無く、一種の「お洒落」を意味する記号になっている。ちょうど、子供たちが首に結んだだけで、超能力を持った架空の生き物になりきれるスカーフのように、あるいはそれ一つで演技者が完全に神にも悪魔にもなりきれる仮面のように。

＊ **服装上の習慣**

最後に、クランフォードの服装上の重要な決まり、ないしは習慣の一つについて述べよう。クランフォードでは、極く些細な用件でも、午前中に他家を訪問してはならず、それが許されるのは正午以降である。彼女等の午前中の服装は都会の婦人たちのような、いわゆるネグリジェとかデザビエとかいった、朝専用のゆったりした衣服というわけではない。それらはたとえば故人となった姉のお古の、繕いだらけの帽子や、継ぎの当たった襟のような、質素さを常としている彼女らでも、さすがに人目には晒したくないという代物である。そしてレディ達は12時近くになると、訪問に備えて、ないしは来客に備えて着替えをする習慣がある。もっとも、すでに紹介した通り、すべてにわたって質素な彼女等のこと、着替えと言っても、本格的なアフタヌーン・ドレスというわけではない。どうやら帽子と襟をかえるだけのようである。しかしこの些細なしきたりは彼女らにとっては極めて重大なことであったらしく、着替えを済ませる前に訪問客の襲撃に会った際の動転ぶりが、二度も出てくる。その場面の一つを引用しよう。

もう数分でクランフォードの訪問時間前の着替えをしようかという時でした。(中略) 扉をノックする音が聞こえました。(中略) 私たちは帽子とカラーを取り替えようと、自分達の部屋へとんでいこう (中略) としてお

りましたら、そこへミス・ポールが上がってきて私たちを呼びとめました。

「行かないでちょうだい――私まちきれないのよ――まだ12時にならないことは知っているわ――着替えなんかいいわよ――お話があるの」

私たちはできるだけ、彼女が聞きつけたあわただしい物音は、私たちがたてたのではないという顔をつくろいました。「わが家の奥の院」で着るのに便利な古着を私たちが持っている、なんて思われるのはいやでしたから。そこで私たちは、服装のほうが少々貧弱なのをうめあわせるつもりで、態度のほうをいつもの倍も上品にしました。[7)]

＊　その意味するところ

以上のような、クランフォードの女性たちの服装に対する態度は、どこから生まれ、何を意味しているのであろうか。その流行遅れや古めかしさは老嬢達の依固地や、お洒落に対する無関心によるものではない。季節に先駆けて開かれる流行品の展示即売の折りの彼女等の興奮振り、また他の衣服はさておき、帽子に対する平素からの気づかいは単なる身じまいの域を遥かに越えている。恐らく彼女等の流行遅れは、むしろその経済的不如意によるものと考えられよう。年に一度の展示即売会に胸踊らせ、繰り出していった一人の老嬢が懐にしていたのは５ポンド金貨一枚であって、それは絹の服地一着分を購う額に過ぎなかった。作品中の食べ物に関する記述からも、彼女等の貧しさは十分に推測できよう。お洒落が帽子一つに集約されるのは、服装全体に費用が回りかねるからであろうことも、想像に難くない。しかし彼女等は互いの貧しさの現れを目にしても決して笑い物にすることはなく、また自らの貧しい姿に恥じ入ったり、悪びれることは無いのであり、それどころか彼女等はそれにある種の価値を見出してさえいるのである。たとえばそれは、次のような言葉に示されている。

「上品につましく（elegant economy)」何て、いつのまにか、ついクランフォード流の言葉使いになってしまいますね！　この町ではつましくすることはいつでも「上品（elegant)」で、金を使うこと（money spending)はいつも「俗で見栄っ張り(vulgar and ostentatious)」でした。[8)]

ここでの上品(elegant)は、豊かな経済力を背景として生まれる姿や振る舞いの優雅さ、上品さといった一般的意味とは異なっており、それは貧しさ故のつましさと矛盾せず、両者はむしろイコールで結ばれている。そして豊か

さを示す姿や振る舞いよりも、高く位置づけられているのである。

日本語の上品にあたる言葉として、elegantよりも多く用いられるのがgenteelである。

いろいろ上品な風格（genteel qualities）をお持ちのうえに、「俗な成金趣味（vulgarity of wealth）なんか全然ない方…[9]

上品（gentility）とはふつう夕食を食べないことを言うのですが…[10]

夕食も食べないような貧しさがgenteelの伴侶となり、そのgenteelはまた富がもたらす俗っぽさの対極をなしている。

貧しさを評価するこうした態度は一種の負け惜しみ、またはやせ我慢とも受け取れよう。実際語り手の「私」は皮肉な調子でこうした内容を語っている。けれども身分に不相応なほどに貧相ななりをした男爵夫人や、半世紀近くも昔の服を着た退役軍人を、クランフォードの社交界が、ただその人柄故に受け入れるという風に物語を展開させた時、作者の価値観はおそらく、この風変わりななりをした老嬢たちのそれに近かったと思われる。

他方、きちんとしたみなり、帽子への強い関心、訪問時間のための着替えのしきたりといった服装に対する態度からは、気取り屋で見栄っ張りのヴィクトリアンのイメージが描かれるよう。けれども、それははあくまでも、上述の貧しさとつましさへの評価を踏まえたものでありながらも、その貧しさとつましさを覆い隠し、無視しようとするものでもある。午前中の姿の貧しさは、本来着替えによって隠されるべきものであった。それが期せずして人目に触れてしまった時、態度のgentilityを二倍にしたという叙述は、貧しさを隠すことにもgenteelが存在することを物語っている。もっとも彼女らの振る舞いには、しばしばまさに「頭隠して尻隠さず」の不完全さが見受けられ、それが「私」を通して語られる時、ユーモラスな笑いを引き起こしている。けれども、彼女等にとっては、たとえ見破られていようと、さして問題ではない。隠そうとすること、またそうした態度がひとつのサインとして見受けられるだけで充分なのであり、それが見受けられる場合には、貧しさを見えない振りをする。そして、つまり「暮らし向きのきわめて質素な人間だという俗な事実に、躍起になって目をつぶろうとしていた」[11]のである。 彼女等にとって、たとえば新しい帽子はそうしたサインである。次の二つの叙述は、こうした服装に対する態度の説明となろう。

クランフォードの淑女の中には、貧しくて、日々の暮らしにも事欠くよ

うな人が何人かいたと思います。でもスパルタ人のように、その苦しみを笑ってこらえるのでした。(中略) 優しい団体精神を持ち、そのうちの誰かが貧乏を隠そうとした時はそれがうまくいかなくても見て見ぬふりをしました。[12)]

(パーティの主人役が、堂々とおさまって客を迎えてはいるものの) じつは午前中いっぱいかかって、パンやスポンジ・ケーキの準備に大わらわだったことはご本人が承知で、私たちも承知で、私たちが承知なことはご本人も承知で、私たちが承知なことはご本人も承知ことを私たちも承知だったのです。[13)]

* おわりに

このように、クランフォードのレディ達の服装の特徴は、豊かさにせよ、貧しさにせよ、経済的状況の表現、あるいはそのわずかな暗示すらをも避け、互いの姿や生活からそうしたものを感じ取ることをも退けようとする、その虚構の中にgenteelなる一種の美意識を見出そうとする態度から生まれたものと言えよう。しかし逆説的に言えば、そうした態度は経済という問題に、彼女らの意識がいかにかかわっていたか、またかかわらざるを得なかったかを示している。ここにはユートピア、「クランフォード」にまで押し寄せ、「優しい団体精神」を破壊するかもしれない経済力の脅威に、気丈にも背を向け、押し流されまいと抵抗する女性たちの姿が見られる。読者がその姿に親しみと愛着を覚えるのは、そこに巨人に立ち向かってゆく幼子の無邪気さと非力を見るからではないだろうか。そして本作品は、19世紀の社会構造が生み出し、当時表面化しつつあった問題への、作者の密かな、けれども明確な認識の表明でもあったと思えてならない。

註

1) 山脇　百合子　『ギャスケル研究』　北星堂書店1976年281頁
2) E.ギャスケル作、小池　滋　訳　『女だけの町　クランフォード』　岩波文庫　1986年　9頁　(以下本書を文献Aと表す)
Gaskell, E ; Cranford. J. M. Dent and sons Ltd.,Lond., 1906 p.2-3(以下本書を文献Bと表す)

3) 文献A 143・144頁、 文献B p.92,93
4) 文献A 152・153頁、 文献B p.98
5) 文献A 173頁、 文献B p.112
6) 文献A 173頁、 文献B p.112
7) 文献A 258・259頁 文献B P.172,173
8) 文献A 13頁 文献B p.5
9) 文献A 186頁 文献B p.121
10) 文献A 159頁 文献B p.102
11) 文献A 14頁 文献B p.6
12) 文献A 11頁 文献B p.3.4
13) 文献A 12頁 文献B p.4